

尻別川の未来を考える オビラメの会

OBIRAME RESTORATION GROUP NEWSLETTER

32

July 09



尻別川本流で放流イトウを初確認

釣り師の本田哲也さんから通報

「尻別川で標識イトウを釣りました」と、倶知安町在住の本田哲也さんからオビラメの会事務局に電子メールが届きました。添付された写真に写ったイトウは、とても良いコンディションで、アブラビレが切除されています。当会が尻別川支流の倶登山川流域で実験的に放流(再導入)した2004年春生まれの人工孵化イトウのうちの1匹に間違いなく、この個体が放流後、約5年にわたって自然状態で健康に成長してきたことが確認されました。

放流イトウの追跡調査は、当会モニタリングチームが継続中ですが、一般の釣り師から「放流イトウが釣れた」と情報が寄せられたのは初めてで、尻別川本流での放流魚確認も初めて。再導入実験プランを立案した川村洋司会員(北海道立水産孵化場主任研究員)は「実験の成果を検証するのに、たいへん貴重な情報です。イトウは成長に従って広く下流域に分散していく習性があり、追跡するには、一般の釣り人の支援が不可欠。今後も尻別川の釣り人のみなさんからの情報提供に期待しています」と話しています。



尻別川本流で釣り上げられた放流イトウ(本田哲也さん提供)

本田さんから当会に届いた電子メール

保護活動いつもご苦労様です。倶知安町の本田と申します。6月5日金曜日のお昼頃、尻別川(****地点)で、ルアーで釣れました。体長50センチ弱で、あぶらヒレは無く、腹ヒレはありました。放流魚だと思えます。魚は、ルアーをはずし即リリースし元気な状態で川へ戻しました。そうそう無いと思いますが、釣れてしまった時は、またご連絡いたします。役に立つ情報かどうか分かりませんがメールにてご連絡致します。(乱獲防止のため、具体的な捕獲場所は「****」として伏せました=オビラメの会)

CONTENTS

オビラメ復活30年計画
は第2期へ突入 (2p)
イトウ親魚から人工採卵
はならず (4p)
倶登山川に新魚道 (4p)
勉強会「サケ科の魚がす
める川」 (5p)
「釣道楽」がオビラメ事務
局長の半生紹介 (6p)
朱鞠内湖でイトウ保護
フォーラム (6p)

32

繁殖遡上イトウの探索スタート

イトウ繁殖期に当たる5月、オビラメの会モニタリングチーム(大光明宏武リーダー)は、放流イトウの繁殖遡上調査を初めて実施しました。

2004年秋および2005年春に、尻別川水系倶登山川流域に放流した計約3000匹の人工孵化イトウ(2004年春生まれ)が今年、満5歳を迎え、成熟の早い個体の母川回帰が予想されたため。放流地点付近の河川水温を測定して遡上期を予測しながら、落差工に新設された魚道付近などでイトウを探索しました。

残念ながら繁殖遡上個体は確認できませんでしたが、同時期、会員で映像ジャーナリストの阿部幹雄さんが、同じ倶登山川流域で水中撮影中に放流イトウと思われる複数の魚影を確認しました。



モニタリングチームの大光明宏武リーダー。(2009年5月、撮影/阿部幹雄)

オビラメ30年計画は第2期へ

オビラメの会は6月27日、ニセコ町民センターで2009年度通常総会を開きました。主な内容をご報告します。

【オビラメ復活 30 年計画（第2期）について】

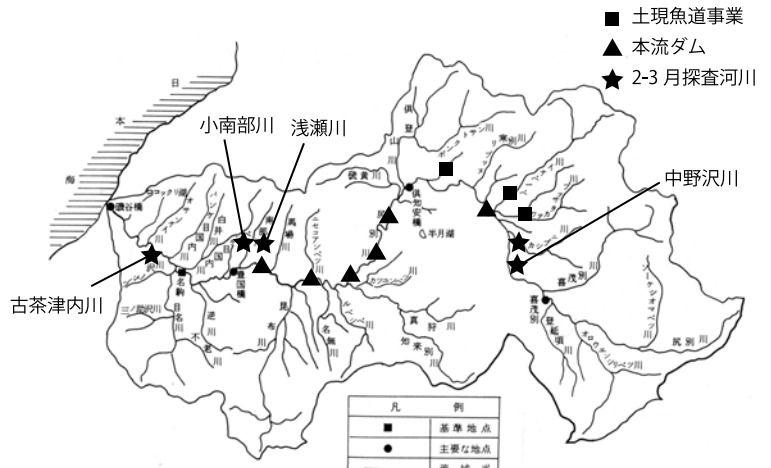
当会は、2010年から2019年までの10年間を第2期と位置づけ、第1期(2001年-2009年)の成果を生かしつつ、再導入エリアの拡大を目指すことにしています。

具体的には、尻別川本流に設置されている6基の発電用ダムに区切られた7つのエリアで、それぞれ再導入に適した環境の調査とプレモニタリングを実施し、必要な環境復元の後、再導入を

図ります。必要となるストック量も増大することから、親魚・稚魚の飼育施設の拡充を図ります。エリア拡大にともない、事業の成否を判定するための放流後の追跡(モニタリング)は、一般の釣り人やアセスメント事業者などからの情報がいっそう重要になると考えています。

尻別川イトウ第2期人工孵化放流計画・2010年～2019年

放流河川数	4～5河川 本流6ダムを基準に4～5河川選定
稚魚放流総数	2～3万尾(～4万尾) 5千～1万尾/1河川
採卵数	4～6万粒(～8万粒)
必要♀親魚数	20～30尾(～40尾)
保有♀親魚数	30～50尾(～60尾)
保有必要親魚数	50～80尾程度



原図／「尻別川治水史」

【2008 年度事業報告】

オビラメ飼育管理	通年	飼育管理
	通年	えさとり
	10月	京極町内で若魚捕獲、飼育中
	5月8日	札幌市さけ科学館からイトウ輸送
	5月13日	採卵会(不発)
	5月24日	採卵会(不発)
調査	随時	新・親魚飼育池についての情報収集
	通年	放流イトウモニタリング調査
	随時	倶登山川落差工魚道検証調査
	2月7日-8日	再導入河川探索会
行政機関との協働	3月20日-21日	再導入河川探索会
	通年	関係機関との事務局レベルの協議
	2月7日	倶登山2.3号落差工事現場視察
教育機関との協働	3月9日	道環境生活部あて意見提出
	9月16日	蘭越高校イトウ講演会(川村洋司さん)
勉強会、シンポ	7月26日	リレーフォーラム(別海)に参加
	8月30日	リレーフォーラム(斜里)に参加
	10月18日	リレーフォーラム(釧路)に参加
	11月29日	イトウ保護連絡協議会・道自然環境課との懇談会(旭川)に参加
	2月8日	オビラメミニシンポジウム開催
	3月21日	勉強会「イトウ再導入河川はいずこ」
	5月23日	イトウ保護フォーラム(朱鞠内)参加
ネットワーク	通年	きたネットへの参加
広報	通年	ホームページ更新、取材協力(釣道楽、釣り新聞ほっかいどう、ノースアングラーズ、北海道新聞、朝日新聞、読売新聞、HTBIほか)
		ニュースレター31号発行

【2008 年度決算報告】

費目	金額(円)	摘要
前期繰越	a 2,076,076	
収入	94,000	会費収入
	3,000	広告収入
	919,600	セブン-イレブンみどりの基金
	900,000	日野自動車グリーンファンド
	561,300	丸紅フットウェア(パタゴニア)
	2,244	利息収入
b	2,480,144	収入 合計
支出	c 1,992,974	事業運営活動費*
差し引き計	2,563,246	a+b-c
	-212,708	セブン-イレブンみどりの基金へ返金
次期繰越	2,350,538	

*内訳の詳細は事務局で閲覧いただけます。

【2009 年度役員名簿】

会長	草島清作
副会長	吉岡俊彦 事務局長兼任
事務局次長	鈴木則行
理事	山本 契
理事	藤盛 聡
理事	鈴木芳房
理事	玉井秀樹
理事	沼田雄一
理事	菅原俊宏 新任
理事	山根敏夫 新任
会計	阿部英治
幹事	河野裕司 調査・研究
幹事	城座研一 調査・研究
幹事	平田剛土 広報・宣伝
会計監査	加藤清三
会計監査	山本契



草島清作会長（前列右から3人目）、吉岡俊彦事務局長（同2人目）ら総会出席者たち。

新任理事から

山根敏夫理事

俱知安町出身の山根敏夫です。尻別川のイトウ、昨年の採卵会で私は初めて目の当たりにして、その大きさ、美しさに感動しました。この素晴らしい魚を絶対に守り、未来に伝えるために行動したいと思います。

菅原俊宏理事

蘭越町在住の菅原俊宏と申します。以前オビラメ勉強会で講師をさせていただいたことがあり、地元の人にはご存じかと思います。意外と地元会員の割合が少なく、事務局長の負担が多いようで、私にできることでしたら力になりたいと思います。

【2009 年度事業計画】

イトウ畜養	飼育管理(稚魚、親魚)、採卵・人工孵化、えさとり、新規飼育池取得手続き
行政との協働	俱登山川落差工対策(後志支庁農村振興課)、砂利川など落差工対策(小樽土木現業所)、尻別川圏域河川整備計画検討委員会、希少種条例関連の協議、開発局との協議
俱登山川関係	放流魚モニタリング、落差工魚道機能モニタリング、レスキューカード配布、情報要請活動
復元事業	新たな再導入河川の探索、人工増殖計画立案
オビラメ勉強会	勉強会、札幌ミニシンポ
ネットワーク	道工大などとの交流、イトウ保護連絡協議会への参加、きたネット、リバーネット
サポーター拡大	助成金対策、ジュニアプロジェクト、NPO法人化検討
広報	ニューズレター発行、ウェブサイト更新、取材協力

【2009 年度事業予算（支出）】

費目	金額(円)	摘要
事業費	600,000	飼育管理
	300,000	新規飼育池取得対策
	250,000	放流魚モニタリング
	100,000	放流魚情報要請活動
	10,000	各機関との協議
	50,000	新たな再導入河川の探索
	30,000	勉強会(3回)
	30,000	札幌ミニシンポ
	70,000	ニューズレター印刷(3回)
	25,000	ウェブサーバーレンタル料
	10,000	そのほか
事業費計	1,475,000	
管理費	100,000	会議費(役員会など)
	100,000	交通費(役員会など)
	20,000	交際費(他団体との協議など)
	100,000	食糧費(イベント時の弁当など)
	30,000	通信費(会報発送など)
	10,000	雑費
	25,000	そのほか
予備費	594,538	魚道機能モニタリングなど
支出合計B	2,454,538	
次期繰越金C		収入A-支出B = 0

【2009 年度事業予算（収入）】

費目	金額(円)	摘要
会費	100,000	@2000×50名
広告費	3,000	まぐろ屋十割
前年度繰越金	2,350,538	
利息	1,000	
収入合計A	2,454,538	

イトウ親魚からの人工採卵はならず

健康状態はすこぶる良好



採卵の期待を込めて雌の「ノリカ」を抱え上げる草島清作会長（2009年5月13日、撮影・平田剛士）

オビラメの会は5月13日、倶知安町内で飼育中のイトウ親魚からの採卵を試みました。

朝から数時間かけて飼育池の水を抜き、計5匹の親魚たちを生け捕りに。いったんいけすに隔離した後、1匹ずつ水槽に移してから全身麻酔を施し、北海道立水産孵化場の川村洋司主任研究員が触診して、抱卵の具合をチェックしました。その結果、雄の「チビ」は十分な成熟がみられたものの、残念ながら雌たちからの採卵数はゼロ。しばらく日数をおけば採卵できるかも知れないと、親魚の一部をいけすに残し、10日後の5月24日、再び採

卵を試みましたが、やはり目的はかないませんでした。

合わせて実施した身体測定では、どの個体にも成長がみられ、健康状態には問題ないことが確認されました。

いっぽう、ニセコ町内の飼育施設「ヌプリの森水」では現在、2003年以降に人工孵化で生まれたイトウたちを次世代の親魚候補として育てています。5月8日には、それまで札幌市豊平川サケ科学館に預託していた2004年生まれの10匹が「里帰り」してきました。

名前	性別	尾叉長(前年比)(cm)	体重(前年比)(kg)
チビ	♂	89.4(+1.1)	7.30(+0.02)
キンチャン	♂?	70.2(+3.1)	4.40(+1.06)
チョウスケ	♀	90.0(+1.5)	10.30(+0.68)
ノリカ	♀	96.0(+4.7)	10.20(+2.16)
ササキサン	♀	97.3(+3.8)	10.50(+1.7)

全国初のユニーク魚道が完成

岩瀬晴夫会員が語る倶登山川 2&3 号落差工魚道の「みどころ」

倶登山川の2号・3号落差工に設けたオビラメの会提案「斜路式玉石張り魚道」(2009年3月完成)は、全国初の魚道タイプです。

もし見に行く機会がありましたら、下流にある完成後1年経過の1号落差工の魚道(ハーフコーン魚道タイプ)と、上流にある魚道計画中の4号(魚道無し)も見てください。

1号~4号を対照すると、従来の魚道との違いが分ります。初の魚道タイプでは、何が起ころか不明な点が多いことに加え、コンクリートを使っていないので、「コンクリートを使わない構造物が増水時の暴力的な流れに耐えられるのか?」、この点が不明です。

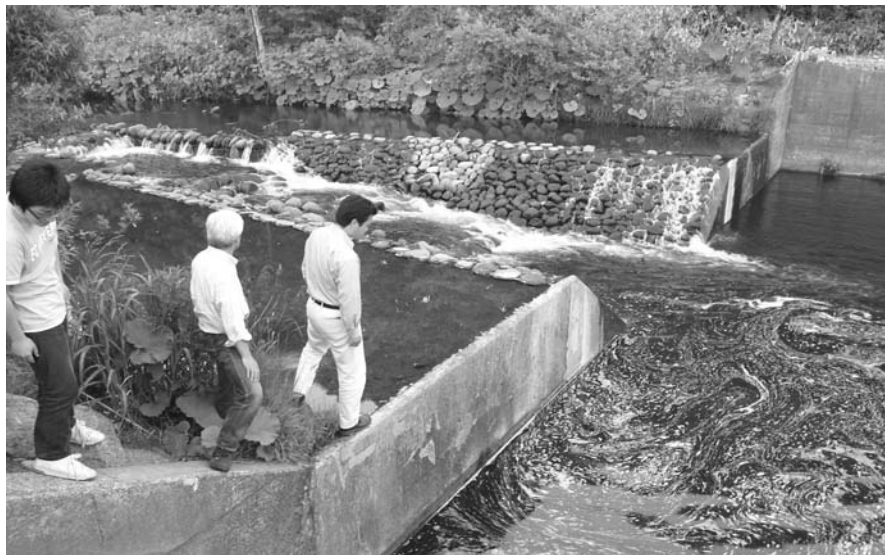
ところで魚道は、耐久性とともに「魚が行き来しているかどうか?」という機能性に真価があります。今後のモニタリング(検証のための調査)が、耐久性と機能性の不明な点を解明してくれるはずです。

ひとりだけの定点目視もモニタリングの一種です。気が向いたら魚道の上下流を含む、川全体を見てください。時間軸と空間軸を変えながら。新たな発見ができるでしょう。



撮影・平田剛士

いわせ・はるお オビラメの会会員、北海道技術コンサルタント・川づくり計画室長



倶登山川2号落差工に新設された魚道(2009年6月27日、撮影・平田剛士)

オビラメ勉強会りぽーと

サケ科の魚が暮らせる川

講師 永山滋也さん

ながやま・しげや 北海道大学大学院農学院博士課程修了(森林生態系管理学)。農学博士。2009年7月から独立行政法人土木研究所自然共生研究センター専門研究員。

撮影 平田剛士

魚類脅かす「生息場の改変」

かつて北海道各地の川には、多くの魚類が生息していたわけですが、現在では、イトウのように絶滅に瀕しているものが少なくありません。魚類を脅かす要因はいろいろですが、最も重大だと思われるのが「生息場の改変」です。サケ科魚類が安心して暮らしていける環境とはどのようなものなのか——。ひとくちに川といっても、姿は様々ではありません。上流から下流に向けて、「山地上流部」「扇状地中流部」「沖積低地下流部」と、大きく3つに分けることができます。私の研究では「山地上流部」と「沖積低地下流部」に的を絞って、魚たちがどんな条件の場所を利用しているか、突き止めようと考えました。

利用ユニットを変えるサクラマス

この研究では、川はいくつかのパーツが組み合わさることで全体が成り立っているという視点に立ち、そのパーツをユニット(流路単位)として分類し、捉えることにしました。そして、電気漁具を使って魚を捕獲し、魚の数、種類、大きさ(年齢)を季節ごと、ユニットごとに集計していきました。

まず山地上流部。6～8月、サクラマス幼魚は「側流路」に多く集まり、大型のオショロコマは「淵」に多く見られ、ハナカジカは「早瀬」と「淵」をよく利用している、ということが分かりました。

季節ごとの変化を追うと、サクラマスでは、幼魚時代(春)は「側流路」で過ごし、夏を迎えると「早瀬」や「淵」に移動。冬は「淵」や「側流路」で過ごします。いったん降海した後、親になって戻ってくると「淵」と「早瀬」をつなぐ移行帯を産卵場として利用していました。

沖積低地下流部でも、魚たちは環境を

使い分けています。小型のサクラマスは「よどみ」をよく利用しますが、大きくなると「水衝部」や「平瀬」を利用するようになりますし、大きなオショロコマは、特に「水衝部」を好んでいました。

倒流木も重要です。下流部では、倒流木の流心側に水流が集まり、良い餌場が生じますし、その裏側には緩流域ができたりもします。緩流域はサケ科の稚魚や、緩やかな流れを好むトゲウオ類に利用される場となります。

川が自ら作り出す縦・横方向の多様な地形と、川沿いの森から自然に発生する倒木などが、いかに重要かが分かります。

再生の試み

ところが近年の河川開発は、河道を固定し、蛇行は直線化、岸辺は護岸し、ダムを造っては魚の自由な往来すら奪ってしまします。川は平瀬ばかりになり、蛇行が許されず「よどみ」の生じる余地也没有。木も倒れ込んでできません。

そんな川を、これからどのようにすれば再生できるでしょう。答えは「川の縦方向・

横方向の地形を多様にする」という一言に尽きます。

実験例を紹介しましょう。石狩川水系真駒内川では、単調だった川岸に人頭大の玉石を詰め込んだカゴを配置しました。

岩盤がむき出しになっていた場所では、連結玉石を両岸から交互にクシ状に張り出させ、砂礫を食い止める仕掛けを施しました。数年で河床に礫が戻り、サクラマスの産卵床が見つかるまでになっています。

次は標津川(標津町)で、人工的に倒木

を投入した例です。重さ800kgの根株の塊を沈め、そこに高さ13mの枝付きの針葉樹をワイヤーで結びつけて投入しました。1年後、この周辺ではサクラマスの幼魚だけでなく海から戻ってきた親魚までもが観察されました。人工的にでも、このように木を丸ごと川の流れの中に投入することで、その周囲にいろいろな環境が生まれ、幼魚から親魚まで、各成長段階の魚が一緒にすめるようになったのです。

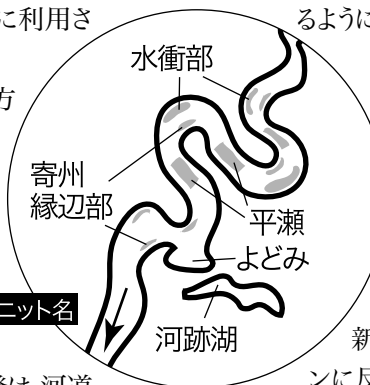
みなさんがイトウの再導入実験をされている倶利伽藍川では、3つの落差工に新しい魚道が造られたばかりです。「泳ぎ上り式」「メンテナンスフリー」「低コスト」「住民参加型」といった新しい要素をこの魚道デザインに反映させたいと主張され、2

号・3号落差工の魚道は「泳ぎ上り式」の斜路型魚道になりました。

ただ、やはり実際に機能を確認することが大事です。単に「下流から上流に向けて何匹の魚が上った」というだけでなく、この魚道がどれほど優れているのか、きちんと評価すべきだと思います。比較対象として、自然の瀬でも魚たちの「通行量」を調べ、1号の階段型、2・3号の斜路型魚道も同じ方法で調べて、互いに比較すると、機能の差をきちんと評価できるでしょう。

国土交通省が「多自然川づくり」の技術基準を改定するなど、川が自由に滞筋を変えながら流れられるような工事への方向転換が進みつつあります。川のダイナミズムによる生態系回復を目指す一歩であることは間違いありません。私の研究が少しでも貢献できればと願っています。

2009年6月27日、ニセコ町民センターでの講演要旨。より詳しいレポートをオビラメサイトでご覧いただけます。



イトウ保護フォーラムに参加しました

第8回北海道イトウ保護フォーラム(朱鞠内湖淡水漁協主催、イトウ保護連絡協議会など後援)が5月23日、幌加内町の朱鞠内湖畔で開催され、オビラメの会からも草島清作会長以下、10人あまりが参加しました。北海道立水産孵化場の川村洋司主任研究員が講演し、猿払川での最新の調査データをもとに、イトウ釣りでのキャッチ&リリースの有効性を報告。またフライフィッシングガイドの千葉貴彦さんが、なるべく魚体を傷つけずに釣りを楽しむことの大切さを説きました。

2010年度のイトウ保護フォーラムは、「ソラプチ・イトウの会」主催で、南富良野町で開催される予定です。

イトウ保護連絡協議会

<http://itou-net.hp.infoseek.co.jp/>



撮影・平田剛士

「釣道楽」が吉岡事務局長の半生紹介



北海道の釣り・野遊び道楽誌『釣道楽』第5号が6月25日発売になりました。多くの釣り人に多大なる影響を与えた偉大な釣師を独自の視点から紹介する『釣師の足跡』は、『釣道楽』の核と言える総力特集です。第5号では吉岡俊彦氏にご登場願いました。オビラメの会事務局長でもある氏の波乱万丈な少年期から青年期、そしてイトウとの関わりについて触れています。多くの苦労を経て手にした巨大なイトウの数々……。そこにはひとつひとつ感動的なドラマがありました。是非ご一読を!

道内有名書店、有名釣具店にて販売しております。また、通信販売も行っております。購入ご希望の場合は下記ファックス番号に、『釣道楽・第5号〇冊希望』と書いて、お名前、ご住所、電話番号を明記して送信下さい。振り込み先案内を同封し、幣誌をお送りしますので、到着後10日以内に代金をお振込下さい。

坂田潤一・「釣道楽」編集発行人

■定価1,890円(税込み)+送料110円

■お問い合わせ／株式会社 碧風舎

TEL 011-826-6917 FAX 011-826-6918

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えてお振り込み下さい(手数料はご負担願います)。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末(5月)までです。おおむねひと月以内にニュースレターをお届けします。

■年会費2,000円

■郵便振替

02720-9-11016

■加入者名

「オビラメの会」

標識オビラメ見つけたら

☎0136-44-2472

オビラメ事務局マデ

ご支援

ありがとうございます

patagonia

オビラメの会は、会員のみなさまよりの会費と、パタゴニア日本支社の助成金を受けて活動しています。

オビラメの会ニュースレター 第32号(2009年7月発行)

OBIRAME Newsletter No.32 July 2009

■発行■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会

■編集■ 平田剛士

■印刷■ (株)須田製版 (北海道滝川市栄町3-5-16)

■発送■ 吉岡俊彦

■郵便振替■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」

■オビラメの会事務局■

北海道虻田郡ニセコ町富士見65「まぐろ屋十割」内

吉岡俊彦方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472

copyright 2001-2009 Obirame Restoration Group

<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

水と空気、みどりの大自然

ニセコが好きだ

楽しんだあとは川を語ろう

まぐろ屋十割

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 44-2472

Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp